

# 二ノ宮神社古墳

【所在地】岐阜県各務原市鵜沼西町

【築造時期】7世紀中頃

**周辺の古墳群** 二ノ宮古墳は標高 62 m の段丘上に立地し、ここから木曾川流域をのぞむことができる。現在古墳には神社の本殿が建ち、墳丘そのものはなく、横穴式石室の一部が残るのみである。

古墳の約 500m 西には 7 基からなる鵜沼西町古墳群がある。三角縁神獣鏡が出土した一輪山古墳（3号墳）や大型円墳の衣装塚古墳（1号墳）が含まれ、前～中期の古墳群と推定される（図1）。

この古墳群に近接して一辺約 20m の方墳となる鵜沼西町古墳が確認されている。7世紀後半頃に築造されたこの首長墓は、二ノ宮神社古墳との関係が注目される。

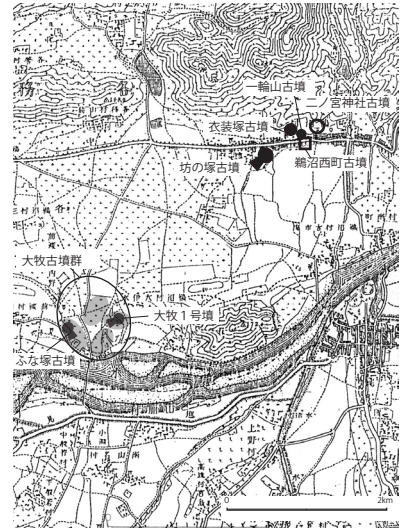


図1 古墳群位置図

**墳丘の特徴** 消失した墳丘の手がかりは、『小川調書』に残されている（図2）これによれば古墳は二段築成の円墳と認識されており、

推定される規模は直径約 30m、高さ約 6.5 m と大きい。墳丘北側には葺石も観察されたようである。石室が開口するあたり（おそらく露出した正面の天井石までの高さ）は約 3.3m で、今回奥壁近くの露出した天井石の高さまでを約 3.5m と計測している。古墳は盗掘されており、過去に出土した副葬品などの情報は伝わっていない。

『小川調書』は現在のように天井石が露出していない時期に記録されたと考えられるが、いずれにしても美濃における大型石室を導入した首長墓を知るうえで参考となる。

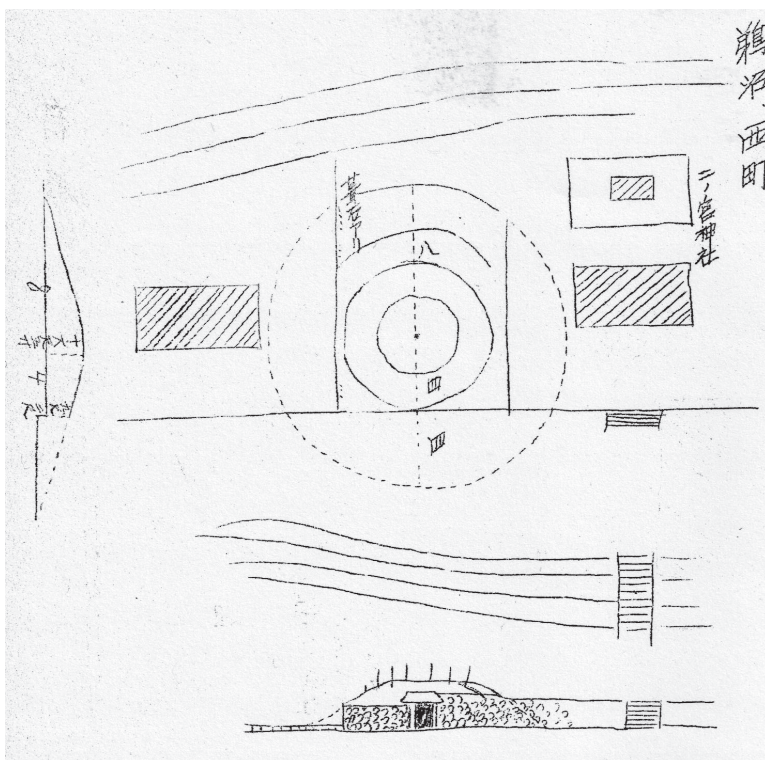


図2 墳丘図 (S=1/400)



古墳の現状

**横穴式石室** 境内にある玉垣の中にみられる巨石は横穴式石室の一部である。この部分は玄門にあたり羨道部などは失われている。過去の記録にも記載がないためこの部分の詳細は不明である。

石室は南方向に開口する。玄室は両袖式で玄門には袖石をおく。平面形は長方形で、大きさは長さ5.0 m、最大幅2.4 m、最大高約2.2 mとなる。玄室の奥壁には鏡石をおき、その上に横方向に1石をおいて天井石を支えている。

側壁は2段積みを目指して、右側壁は大型石材を3つ立て並べておきその上にもう1石を積み、左側壁は奥壁側に大型石材を立てておいてその南側にひときわ大きい石材を横方向におき、その上に1石を積んでいて、左右側壁の積み方が異なる。

玄門部は一段低くした楣石と考えられる。また玄室右側の袖石とその隣の石材は3D計測の重ね合わせから、もともと1つの石材を割って使用していることが明らかとなり、当時の石材の使用方法を考えるうえでも貴重な事例となる。

天井は3枚の大きな石が架けられているが、その間からは詰石が観察できる。さらに階段をあがった本殿前では天井石の石材が一部露出しており、その大きさをみることができる。



石室内部（玄門より）



石室内部（奥壁より）

**古墳の意義** 二ノ宮神社境内に残る横穴式石室からは、その構造上の特徴から古墳の築造時期を7世紀中頃と推定する。さらに過去の記録からは直径約30 mとなる大型円墳である可能性が高いことも明らかになった。二ノ宮神社古墳は東海地方でも有数の終末期古墳と位置づけられる首長墓である。

二ノ宮神社古墳が築造される頃は、列島社会は前方後円墳から方墳や円墳に移行している。鶴沼地区でもふな塚古墳や大牧1号墳などの前方後円墳ののち、二ノ宮神社古墳や西町古墳などの円墳や方墳に移行したと考えられる。

鶴沼の有力首長層は6世紀後半から7世紀中頃までの間、連続して中央の政治的変動を受けたことが古墳から理解できる。そのことを二ノ宮神社古墳は伝えてくれる貴重な古墳である。

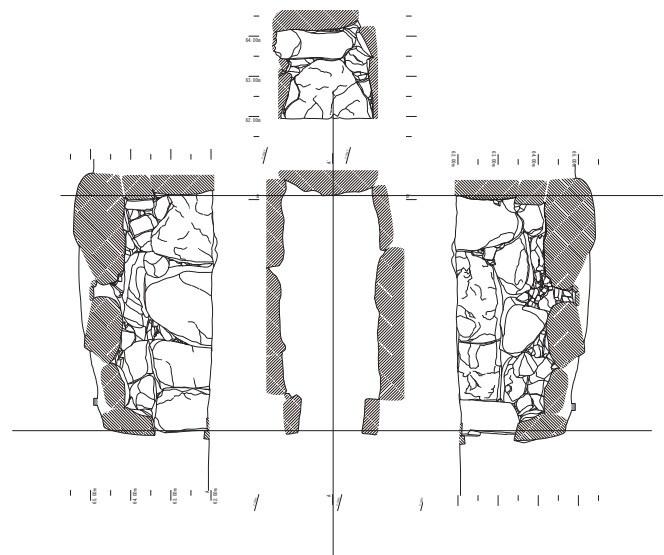


図3 石室図 (S=1/200)

【参考文献】 小川栄一著作『稲葉郡調書三』(の原典)、岐阜縣師範學校郷土研究室 1931『郷土研究資料』第二号  
各務原市教育委員会 1983『各務原市史 考古・民俗編 考古』各務原市